

尋常小學讀本 卷三

文部省





尋常

小學讀本

卷三

文
部
省



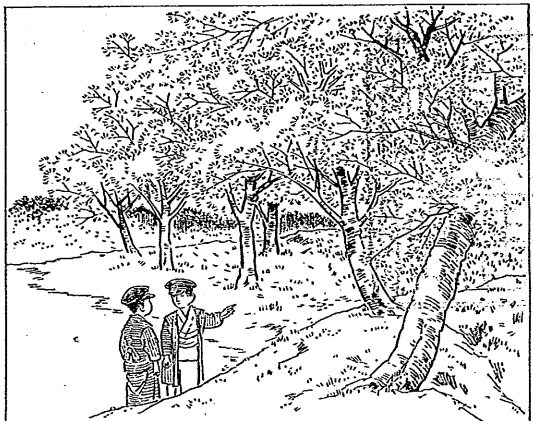
モクロク

一	サクラ	一	十四	うとからず	四十
二	コレガ	三	十五	ミギトヒダリ	四十二
三	ノアソビ	六	十六	四方	四十四
四	ワタクシノウチ	十	十七	ほしとり	四十五
五	ノミノスクネ	十三	十八	かへる	四十七
六	ヒバリ	十七	十九	かへるとくも	五十
七	なぞ	二十二	二十	ハイ今スグニ	五十二
八	うしとらま	二十三	二十一	虫ボシ	五十五
九	こうま	二十五	二十二	うみ	五十八
十	タケ	二十七	二十三	かひ	六十一
十一	タウエ	三十一	二十四	ウラシマノハナシ(一)	六十四
十二	はたる	三十四	二十五	ウラシマノハナシ(二)	六十九
十三	がくかうへもつていくもの	三十七			

尋三

一 サクラ

ヲカノ上ニモ



ツツミノ上ニモ、
 サクラノハナガ
 一メンニサキマシタ。
 マコトニウツクシイ
 デハアリマセンカ。
 ヒラヒラトカゼニ
 チルノモマタミ

さへ

日本
うつくし
い

ゴト デス。
ムカフノ山ニハ、ユキガフツタヤ
ウニ白クナツタトコロガミエマス。
アレモサクラノハナデス。
サクラノ木ハ、ヨツノクニニハ、
コンナニタクサンアリマセン。アツテモ、
日本ノサクラノヤウナウツクシイ
ハナハサキマセン。

三
三

はな
やま

うし くら くつ
いし くさ
ニコレガスンデカラ
ハルノアタタカイ日ニ、マサヲガ
本ヲヨンデキマシタ。ウツクシイサク
ラノハナガ、マドノソトカラノ
ヅイテ、
「マサヲサン、ノニモ山ニモワタク」

三

シドモ
ノナカ
マガ
タクサン
サイテ 弁マス。デテ キテ、イツシヨ ニ
アソビマセン。カ。
マサヲ ハ ミムキ モ シナイデ、
ゴレ ガ スンデ カラ イキマセウ。



小
とり

コンド ハ ウツクシイ 小トリ ガ マド
ノ ソト カラ ノゾイテ、
「マサヲ サン、ソンナ ニ ウチ ニ バカ
リ 弁ナイデ、チツト ソト ヘ デテ、イ
ツシヨ ニ ウタ ヲ ウタヒマセウ。
マサヲ ハ ヤツパリ ミムキ モ シナイデ、
ゴレ ガ スンデ カラ イキマセウ。
スコシ タツテ オサラヒ ガ スミマシタ。

のはら

ソコヘトモダチガサソヒニキマシ
タカラ、ヨロコンデイツシヨニノハラ
ヘアソビニイキマシタ。

はなさく。とりなく。

三ノアソビ

マサヲトモキチトオハナガ三人
デノハラニアソンデキマス。
ノハラニハ、アライクサノ中ニ、ア

あか

人

きいろ



カヤ、キイロヤ、ムラ
サキヤ、イロイロナハ
ナガサイテキマス。
トモキチ「コレカラハナヲ
ツミマセウ。ボクハ
レンゲヲツムカラ、
マサヲサンハタン
ホポヲオツミナサ

「イ。

オハナ「ツレデハワタクシハスミレヲツ

ミマセウ。

たぐさん

マサラ「ボクハモウコンナニタクサン

ツミマシタ。

て

トモキチ「ボクモモウテニ一パイニナ

リマシタ。

オハナ「スミレハタクサンナイカラ、マダ

むらさき

ツンナニツメマセン。

ツレカラ三人デツンダノヲイツ

シヨニシテ、ハナタバヲコシラヘマシタ。

アカトキイロトムラサキト三イロ

ソロツテキレイデス。

あたたかい日 あさい川

たかい木 しろい土

小さなむしがとんできました。

大きなうまがはしつてきました。

四 ワタクシノウチ

ねえさん
一人

ウチニハネエサンガ一人ニイサン
ガ三人オトウトトイモウトガ一人
ヅツアリマス。一バン上ノニイサン
ハイマヘイタイニイツテキマス。ネ
エサンハコノアヒダトナリムラヘ
オヨメニイキマシタ。

へいたい

おとうと

いぬ

にいさん

ワタクシハオカアサンノイヒツケヲ
ヨクキイテ、イモウトノモリヲシタ
リオツカヒニイツタリシマス。オトウ
トハ犬ガスキデ、イツモブチト
アソンデキマス。
オトウサンヤニイサンハマイアサハ
ヤクカラタンボヘイキマス。ウチノ
人ガミンナソトヘデルトキニハ

おるする

オバアサン ガ オルスキ ヲ シマス。

バン ノ ゴハン ノ スンダ アト デ、オ

デイサン ハイロイロナ オモシロイ ハナ

シヲ キカセテ クダサイマス。

へや の 中 まで あかるく なりまし
た。

には の まつ の 木 の 上 へ 月
が でて るます。

ちから

には とり は とや で ねて るます。
いぬ は おきて、 ないて るます。

五 ノ ミ ノ スクネ

ムカシ タイマ ノ ケハヤ ト イフ チカ

ヲ ノ ツヨイ 人 ガ アリマシタ。 ウシ ノ

ツノ ヤ、 シカ ノ ツノ デモ ヲツテ シマ

フ ホド デ、 ダレ ト スマフ ヲ トツテ

モ、 マケタ コト ハ アリマセン。 ソレデ

だれ

中
よわい

「日本中ニハヨワイモノバカリデ、ジ
ブンノアヒテニナルモノバー
人モナイ。」

ト、イバツテ、キマシタ。

それを
子
のみのすく
ね

ソレヲ天子サマガオキキニナツ
テ、ノミノスクネトイフ人トス
マフヲオトラセニナリマシタ。
ケハヤハツノナノトホリ、ケル
コ

けは
や



トガマコトニハヤカツタノデス。シ

カシスクネモチカラガ

ツヨクテ、スバシコイ

人デシタカラ、ナ

カナカケハヤニハ

ケラレマセン、スキ

ヲネラツテ、タツ

タ一ケリデ、ケ

ほめる

ハヤヲ ケタフシマシタ。
ミテ キタ 人 ハ ミンナ 一ド ニ テ
ヲ タタイテ ホメマシタ。

「おれ より ちからの つよい 人は
あるまい。」

といつて、けはや が じまん を しま
した。しかし のみの すくね には ま
けました。それで けはや は わらはれて、

すくね は ほめられました。

六 ヒバリ

ふく
おもしろい上
こゑ

アタタカイ カゼ ガ ソヨソヨト ムギ ノ
ホ ノ 上 ヲ ファイテ キマス。ヒバリ ガ
オモシロサウ ニ サヘヅツテ キマス。
ゴラン ナサイ、マタ アソコ カラ モ 一ピ
キ 上リマシタ。サヘヅリ ナガラ ダンダン
タカク 上ツテ イキマス。モウ コエ バカ



リ キコエテ、スガタ
 ハ ミエマセン。サヘ
 ズル ダケ サヘズル
 ト、イマ ニマタ オリ
 テ キマセウ。オリル ト
 キ ニハ、オチル ヤウ
 ニ ハヤク オリテ キマ
 ス。

ひばり
 おりません

ヒバリ ハ オリル トキ ニハ、ケツシテ
 ス ノ、アル トコロ ヘ ハ、オリマセン。
 ケレドモ 上ル トキ ニハ、スカラ スグ
 トビタチマス。

ゆふがた

ユフガタ ニ ナツテ モ、オヤドリ ガ オ
 リテ コナイ トキ ニハ、子ヒバリ ハ ス
 ノ 中 デ、ドンナ ニ マツテ キル コト
 デセウ。

ひばちが一つ。ゆのみが二つ。
 ふえが三本。ゑ本が四さつ。
 子どもが五にん。

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と

か	ぎ	ぐ	げ	こ
ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
だ	ぢ	づ	で	ど

な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	い	ゆ	え	よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	ゐ	う	ゑ	を
ん				

は	び	ぶ	べ	ぼ
は	ひ	ふ	へ	ほ

七 なぞ

手

わたくしには口も目も耳もありません。手もあしもあります。まゝいけれどもまりのやうにまんまるではありません。うごかずにゐますが、しんだのではありません。

私

私をころがすのはだれにもできませんが、たたせることや、二つかさね

牛

ることは、どうしてもできません。私はそとがかたくて、中がやはらかです。かたいものにあたればこはれます。私はなんでせう。

八 うしとうま

牛にはつのがあふけれども、うまにはありません。うまにはたてがみがあるけれども、牛にはありません。

足

うまはからだはほそくて、足がながうございます。牛はからだは太くて、足がみじかうございます。牛のつめは二つにわれてゐますが、うまのはわれてゐません。牛は力がつよいけれども、あるくことがおそろひございます。うまは牛よりよわいけれども、はしることは

力

馬

やうございます。どちらもたいそうやくにたつどうぶつでございます。

九 こうま

はいしい、はいしい、

あゆめよ、小馬。

山でも、さかでも、

ずんずん あゆめ。

走

おまへが

すすめば、

わたしも

すすむ。

あゆめよ、あゆめよ、

足おと たかく。

はかばか、はかばか、

走れよ、小馬。



けれども いそいで

つまづく まいぞ。

おまへが ころべば、

わたしも ころぶ。

走れよ、走れよ、

ころばぬ やうに。

十タケ

四五日 マヘニ アタマヲ ダシタ タケ

ノコガ、モウコンナニノビテ、私ノ
 セイトオナジクラキニナリマシタ。
 コレカラ二三日タツタラ、マダズツト
 タカクナリマセウ。ダンダンノビルト、
 タケノカハガオチテ、



竹

リツパナ竹ニナリマス。アトラシイ
 竹ハアヲアヲトシテ、マコトニウツク
 シイモノデス。

作

竹ハイロイロナヤクニタチマス。
 ダイータケノコガタベラレマス。タケノ
 カハハモノヲツツムノニツカ
 ハレマス。フデノデク、モノサシフエ
 ツエザルカゴナド、竹デ作ツタモ

ノガタクサン アリマス。竹馬モ竹
デコシラヘ、タコノホネモ竹デ
作リマス。

ツノホカ竹ノスダレモアリ、竹
ノカキネモアリマス。タルヤヲ
ケニモ、竹ノタガガカケテアリ
マス。

モノホシザヲニモ、コクキノサヲニモ、

センドウガ舟ヲヤルサヲニモ、竹
ヲツカヒマス。竹ノツカヒミチハマ
ダマダタクサンアリマス。

十一 タウエ

アメガフリツヅイテ、田ノ水ガタ
クサンニナリマシタ。ドコデモ田ウエ
ガハジマツテキマス。

馬ニマグハヲヒカセテ、田ヲカキ

入

ナラシテ 唄ル人モア
リマス。ナハシロ デナ
ヘヲ トツテ 唄ル人
モ アリマス。ナヘカゴニ
ナヘヲ 入レテ、ハシツ
テ イク人モ アリマ
ス。コドモ ガ ニ三人
アゼ ニ タツテ、ナヘ



女

ヲ 田ノ中ヘ ナゲ入レテ 唄マス。
ナヘヲ ウエテ 唄ル 女ハ、マルイカ
サヲ カブツテ、アカイ タスキヲ カケ
テ、コエ ヲ ツロヘテ、ウタツテ 唄マス。
アノ ウタヲ オキキ ナサイ。

「ゴトシ ハ ホウネン、

ホニホガ サイテ、

ミチノ 小グサモ

米ガナル。

ゴラン ナサイ、モウ アノ ヒロイ 田ガ
 ハンブン バカリ ウワリマシタ。イマニ
 アノ ナヘ ガノビテ、アライ タタミヲ
 シイタ ヤウ ニ ナリマセウ。

十二 ほたる

ある ばん まさを は はは と いつしよ
 に まそ から かへつて きました。

母

みちで ほたる を 一ひき つかまへて、
 母 から かみ を もらつて つつみました。
 あをい ひかり が かみ の 上 から す
 いて みえます。

光

うちへ かへつて、ちちに みせようと
 したら、光 が みえません。

「おや、にげたのかしらん。」

と、いそいで かみ を あけて みると、



ほたるはやはり中に入る
ます。けれども光つてはる
ません。

まさをはふしぎさうに、

「どうしてもう光らないのでせう。」

といひますと、父は

「ここがあかるいから、みえないの
です。くらいところへはなして、くら

行

ん。

といひました。父のいふとほり、そと
へはなしたら、あをく光りながら、しづ
かにとんでいきました。

十三 かくかうへもつていくもの

七じがなりました。さあ、これからが
くかうへ行きませう。かくかうへもつ
て行くものは、みんなこのふろしき

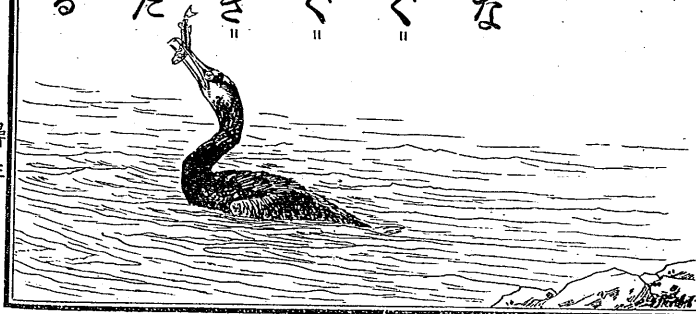
の中につつんであります。ほかにまだだいなものが三つあります。だい一には目です。これで本の中のじゃあや、せんせいの見せてくださるいろいろなものを見るのです。だい二には耳です。これが必要れば、せんせいのおつしやることや、みんな

の言ふことがわかりません。私はよるよくねむりますから、目はいつもはつきりしてゐて、よく見えます。耳もよくきこえて、ききおとすやうなことはありません。だい三には口です。なにをきかれても、この口ではつきりこたへます。けれどもそのほかによけいなことは

言ひません。

十四 うとからす

うが川の中でさかな
をとつてゐました。今もぐ
つたかとおもふと、すぐ
に一ひきくはへて、でてき
ます。それをたべると、また
すぐにもぐります。見てゐる



出

心

うちにまた一ひきくはへて、ういて
出ます。それをからすが木の上
から見えてゐて、

水の中へはいつたら、どんな心も
ちだらう。一つやつて見
よう。



と、川の中へはいりま
したが、がぶがぶと水を

のんで、とうとう しんで しまひました。

う の まねする からず、水 に おぼ
れる。

十五 ミギ ト ヒダリ

ミナモト ノ ヨシイヘ ト イフ タイシヤ
ウ ガ イクサ ニ 行ツタ トキ、ユフハン
ニハ、ケライ ノ 人 ヲ 右 ト 左 ニ
ワケテ スワラセマシタ。ソノ 日 ノ イク

左右

シヤウ

方

サ ニ テガラ ノ アツタ モノ ヲ 左
ノ 方 ニ ナラベテ、アマリ ハタラキ ノ
ナカツタ モノ ヲ 右 ノ 方 ニ ナラベ
タ ノ デス。
ダレ モ 右 ノ 方 ノ ナカマ ニ ハイ
ル ノ ハ イヤ デス カラ、ミンナ ガ
フンパツスル ヤウ ニ ナリマシタ。ソレデ
イツデモ イクサ ニ カツタ ト イフ コト

デス。

十六 四方

アサ 日ノ 上ル 方ガ 東デ、 ユフ 日

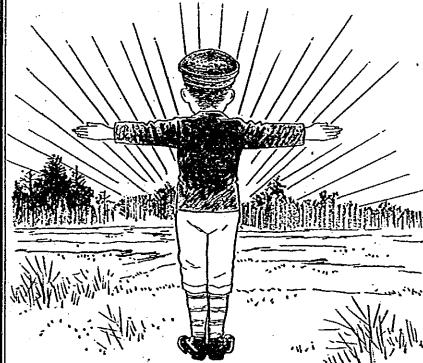
ノ 入ル 方ガ 西デ

ス。

アサ 日 ニ ム カツテ、 手

ヲ ヒロゲテ、 ゴラン ナ

サイ。 右ノ 手ノ サ



東 西

南

北

ス 方ガ 南デ、 左ノ 手ノ サス

方ガ 北デス。

東ト 西ト 南ト 北ヲ 四方ト

イヒマス。

十七 ほしとり

ある ばん 一人の 男ガ そらを む

いて、 ながい さを を ふりまはして るま

した。 そこへ とものだちガ きて、

男

「おい、なにをしてゐるのだ。」
ときくと、

「あまりほしがきれいだから、二つ
三つはたきおとさうと思ふのだ。」
とこたへました。ともだちは
「ばかなことをいふ。そんなところで
さををふりまはしたつて、どうして
とどくものか。それよりはやね

の上へあがつてはたけ。」

といつてわらひました。

十八 かへる

かへるはをかにゐるときには、大
きな目をして、手をついてすわつ
てゐます。

とんぼなどがあたまの上をとび
まはつても、見むきもしません。小さな

虫

虫がまへへくると、ぱくつくつ
て、へいきなかほをしてゐます。

思ひだしたやうにざぶん
と水の中へとびこみま
す。水の中ではあと足
で水をかきながら、あちら
こちらへおよぎまはります。
又さかさまになつて、下



へもぐつて、しばらくたつと、ひとりで
にかぶやうにして、水の上へ
出てきます。

水の上で足をのばして、ぼんやり
うかんでゐることもあります。

人や犬などは水の中になが
く居ることはできません。こひや
ふななどは水から出ると、しんで

居

しまひます。

かへるは水の中にも、をかの上
にもすむことができるのです。

十九 かへるとくも

しだれやなぎに

とびつくかへる、

とんではおち、

おちてはとび、

おちても、

おちても、

またとぶ

ほどに、

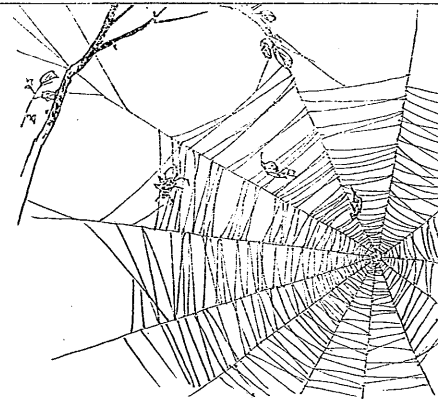
とうとうやなぎに

とびついた。

かぜふく小えだに

すをはる小ぐも、





はつてはきれ、

きれてははり、

きれても、きれても、

またはる

ほどに、

とうとう小えだに

すをはつた。

二十 ハイ 今 スグニ

何

ハツニナル女ノ子ガアリマシタ。

何ヲ言ヒツケラレテモ、

「ハイ、今 スグニ。」

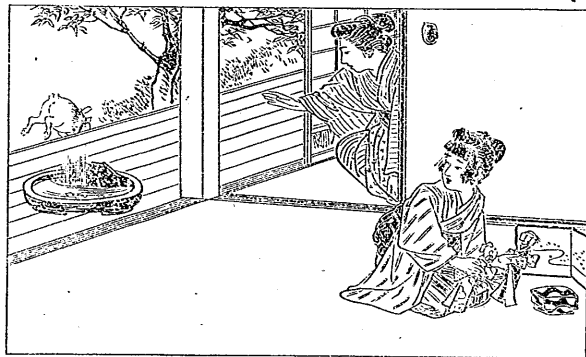
トイヒナガラ、ナカナカ

トリカカリマセン。

「モウゴハンダカラ、

オイデナサイ。」

トヨバレテモ、



早

「ハイ、今 スグニ。」

ト イツテ、ナカナカ スグニ ハ 行キマセン。

「ハヤク オサラヒ ヲ ナサイ。」

ト イハレテ モ、

「ハイ、今 スグニ。」

ト コタヘル バカリ デス。

アル 日 母 ガ

「早く、早く。」

ト ヨンダ ノ ニ、イツモ ノ トホリ、

「ハイ、今 スグニ。」

ト イツテ、スグニ ハ キマセン デシタ。

ソノ ウチ ニ、トナリ ノ ネコ ガ ダイ

ジナ キンギヨ ヲ トツテ、ニゲテ 行キマ

シタ。

二十一 虫ボシ

今日 ハ ウチ ノ 虫ボシ デス。 ザシキ

今日



ノウチニイクスデモ
ツナヲハツテ、ウチヂユ
ウノ人ノキモノガ
ホシテアリマス。アハセ
モ、ワタイレモ、ヒトヘモ
ノモ、カタビラモアリ
マス。アノキモノトハ
カマハニイサンノデ

赤

色

ス。コノ赤イジユバンハ、イモウトノ
デス。アソコニハ、オトウサンノ、チヤイ
ロノオビガアリ、コチラニハ、オカ
アサンノモシツキノハオリガアリ
マス。
私ガヲバサンカラ、イタダイタムラサ
キ色ノハオリハ、イツマデタツテモ、
色ガカハリマセン。

私ガキヨネンマデキテキタワタイ
レハ、ユキモタケモミジカクナツ
テ、モウキラレマセン。

二十二 うみ

青
うみの水が青青として、どこまでも
もつづいてゐます。とほくの方では
青ざらといつしよになつてゐるやう
に見えます。



今日はなみがお
だやかで、舟がた
くさんおきへ出て
ゐます。ほをかけて
ゐるのもあり、か
けてゐないのも
あります。くろいけむ
りを出して走つ

魚

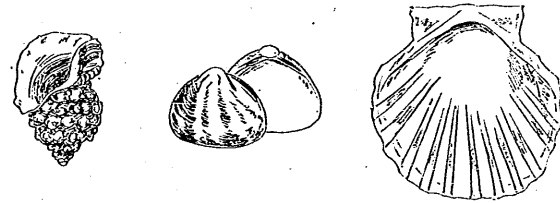
ていくきせんもあります。左の方
にはなればなれになつてゐるの
は、魚をつつてゐる舟です。右の
方に五六そうかたまつてゐるの
は、今あみをおろしてゐるの
です。今にあのあみをだんだん
はまべへひきよせてくると、
女や子どもも大ぜい出て、
いつしよになつてひきあげ
ます。

石

はまべのまつの木の下へ行つ
て見ませう。あそこにはうつく
しいかひや小石がたくさんあ
ります。

二十三 かひ

をぢさんのおみやげに貝をこ
んなにたくさんいただきました。
みんなめづらしい貝ばかり
です。こんなに大きいのもあ
いのも、こんなに小さいのもあ



ります。はまぐりのやうに
二つ 合ふのもあります
が、さざえのやうに、ふか
い、つばのかたちになつ
てゐるものもあります。又
あはびの貝のやうに、
一つでひらたいのもし
あります。



ごらん なさい、この貝がら
は、かたつむりのやうに、
おもてにうづまきがあり
ます。そのうづまきに、右
から左へまはつてゐる
のと、左から右へまは
つてゐるのと、ふたいろ
あります。私はをぢさんに、

買 賣

「どこでこんなにたくさんおひろひになりました。」

と ききましたら、

「いいえ、これはひろつたのではありません。貝ざいくを賣るみせで買つてきたのです。」

とおつしやいました。

二十四 ウラシマノハナシ (一)

太郎

ムカシ ウラシマ太郎
トイフ 人ガアリ
マシタ。
アル 日 ウミベヘ出
テ 見ル ト、子ドモガ
大ゼイ デ カメヲツ
カマヘテ、オモチヤニシ
テ キマス。ウラシマハ



カハイサウ ニ 思ツテ、子ドモ カラ ソノ
カメヲ 買ツテ、ウミ へ ハナシテ ヤリ
マシタ。

ソレカラ 二三日 タツテ、ウラシマ ガ ウ
ミベ デ ツリヲ シテ キル ト、大キナ
カメ ガ 出テ キテ、

リュウ

「ウラシマ サシ、コノ アヒダ ハ アリガ
タウ ゴザイマシタ。オレイ ニ リユウグ」

門

ウ へ ツレテ 行ツテ アゲマセウ。私ノ
セナカ へ オノリ ナサイ。
ト イヒマス。

ウラシマ ガ ヨロコンデ、カメ ニ ノル ト、
ダンダン ウミ ノ 中 へ シヅンデ 行ツ
テ、マモナク リユウグウ ノ 門 へ ツキ
マシタ。

リュウグウ ニハ オトヒメ ト イフ キレ

來

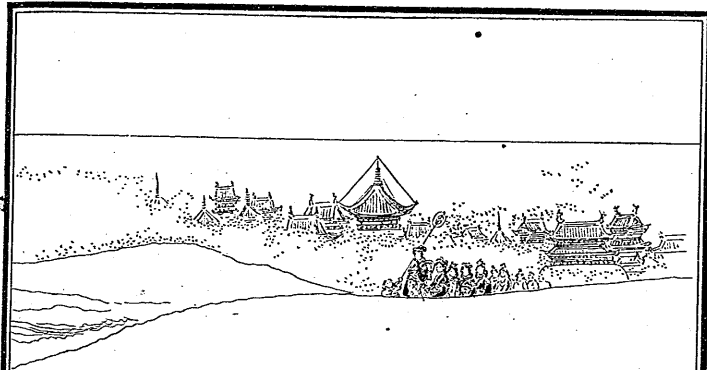
イナオヒメサマガ居テ、ウラシマノ來
タノヲタイソウヨロコシデ、イロイロ
ナゴチソウヲシタリ、サマザマノア
ソビヲシテ見セマシタ。
ウラシマハオモシロクテタマリマセンカ
ラ、リユウグウノオキヤクサマニナツ
テ、ウチヘカヘルノモワスレテキ
マシタ。

六十八

毎

二十五ウラシマノハナシニ
ウマイゴチソウモ毎日タベルト、シ
マヒニハイヤニナリマス。オモシロイ
アソビモ毎日見ルト、シマヒニハア
キテキマス。
ソノウチニウラシマハウチヘカ
ヘリタクナツタカラ、アル日オトヒメ
ニ、

六十九



「イロイロ オセワ ニ ナツテ、
アリガタウ ゴザイマス ガ、ア
マリ ナガク ナリマス カラ、
モウ ウチヘ カヘリマセウ。」
ト イヒマシタ。

オトヒメ ハ

「ソレ ハ マコトニ オナゴリ
ヲシイ コト デ ゴザイマ」

三
七



スガ、ソレデハ オワカレ
ノ シルシ ニ コノ
ハコ ヲ オ上ゲ マ
ウシマセウ。 シカ
シ ケツシテ フ
タ ヲ オアケ ナ
サイマス ナ。
ト イツテ、 タマテ

七十一

バコ ト イフ リツパナ ハコ ヲ ワタシ。
マシタ。

知

海

ウラシマ ハ ハコ ヲ モラツテ、 マタ カ
メ ノ セナカ ニ ノツテ、 海 ノ 上 ヘ
出テ 來マシタ。 ウチ ヘ カヘツテ 見ル
ト、 オドロキマシタ、 父 モ 母 モ シンデ
シマツテ、 ジブン ノ ウチ モ アリマセン、
トモダチ モ ミンナ 弁ナク ナツテ、 知ツ

テ 弁ル モノ ハ 一人 モ アリマセン。 何
ダ カ カナシクテ カナシクテ タマリマセン。
アマリ カナシク ナツタ カラ、 オトヒメ ノ
イツタ コト モ ワスレテ、 タマテバコ ヲ
アケテ 見ル ト、 中 カラ 白イ ケムリ ガ
出テ、 ウラシマ ハ ニハカニ オデイサン ニ
ナツテ シマヒマシタ。

12130.8-2-3

いろはにほへとちりぬ
るをわかよたれそつね
ならむうののおくやま
けふこえてあさきゆめ
みしゑひもせす

をはり

尋三

七十四

明治四十二年七月十五日 翻刻印刷

明治四十二年八月七日 翻刻發行

著作權所有

著作權者

文部省

翻刻者

大橋新太郎

印刷者

愛敬利世

印刷所

博文館印刷所
東京市日本橋區本町三丁目八番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地

明治四十二年七月十三日
文部省検査済

(二五七〇)

發行所 博文館

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所



尋常小學讀本 卷之三

定價金 二